
白の世界

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の世界

【Nコード】

N4101V

【作者名】

ヒイロ

【あらすじ】

眠りから覚めた僕をまっていたのは

目を開けるとそこは純白の世界だった。

いや世界が真っ白と言うよりも、僕の目で見える範囲全てのものが真っ白―清潔な白―に塗りつぶされていた。

起きたばかりでおぼろげな頭をと振り払い、とりあえずあたりを見渡そうとふと右の方に視点を動かしてみた。今は眼鏡をしてないからはつきりは分らないが、そこには四角い機械類が2、3個おいてあるようである。目を凝らしてみると、その上には血のような赤色で染まっている白い布状の物と、何かを吸い取るのだろうか、ホースが着いているようだった。

「よく見えないな……」

眼鏡がないからだろうか。やはり眼鏡は僕の体の一部と言っても過言ではないほど―。

ガチャ……

…だれか来たようだ。

「あれ、もう起きちゃったんだ。体の調子はどうなのかな？」

…どう？　と言われても見たまんまである。

僕の四肢は座っている椅子にベルト状の物で固定されており、口には何か器具が入ってあって、自由に話すこともままならない。これでは身体の調子がかどうかという場合ではない。

僕が自分の状態について戸惑っていると、さすがに今入っていた女性もこの現状に気がついたのであろう。

「あつ…ごめん、忘れてた。キミがあまりも嫌がって暴れるものだから、こつちで固定さしてもらったよ。危ないし、なによりキミのためだしね」

…僕の……ため？

「それとどこか痛みはない？そろそろ薬がきれるんだけどね」

そういわれてもぼくの体にはなんの異状はないしいて言えばこのベルトぐらいだろうか

「そう。なら薬がよく効いているんだね。結構強力なやつにしといたから」

そういつて女の人は僕の体を固定してあるベルトを外し始めた。簡単につくりらしくほん数十秒ほどで僕の体は自由になった。

「それじゃあもう帰っていいよ。終わったからね」

……やりきれない気持ちを抑えながら外へ出てみると薬の効果が切れたのか痛み出してきた。

「……あー。歯が痛い」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4101v/>

白の世界

2011年10月8日19時04分発行